

欧州における新しい労働者階級の問題

—英、仏における最近の研究を中心にして—

小 関 藤 一 郎

I

「新しい労働者階級」とか「ゆたかな労働者」という言葉が使用され、一般に用いられるようになってから、十年以上も経過している。たしかに戦後の四半世紀の間における産業技術の発展とそれにとまなう経済成長は極めて顕著である。その結果従来低所得者の代名詞のように考えられてきた労働者の生活水準は著しく改善されてきたし、家庭用耐久消費財なども労働者の間に普及することとなった。また労働時間も生産性の上昇にもなって短縮され、先進国では週休二日制も例外ではなくなってきている。こうした生活水準の向上と労働条件の改善は労働者の政治的意識、社会的意識にも多くの変化を生ぜしめている。そして労働者の組合に対する考え方や態度にも従来の考え方からは想像されなかったような変化が生じてきている。それはたしかに大きな変化であるといえる。しかし、そうした変化がどれだけ一般化しているのか、あるいはそうした変化によって労働者は全く変質してしまったと見ることができるのかといった点は多くの問題をのこしている。そうした点を明かにするのが本稿の目的であるが、新しい労働者というのは具体的にはどのようなことを意味しているのか、労働者階級のいわゆる中産階級化とはどういうことであるのか、そしてまた果してそうしたことが事実在即して認められるのか、といった点を明かにしたいと考える。本稿では問題の考察を英国、フランスに限っていきたいが、特にフランスにおける労働者に関する考察に重点をおいていきたい。工業化 Industrialization の発展は米国などにおいては労働者とよばれるブルー・カラー (blue-collar) の有業人口中における比率を著しく減少せしめている。たとえば、Faunce によると、1956年すでに米国のブルー・カラーは38.8% (業人口の) で、ホワイト・カラ

ーの39.4%を下廻り、その減退はひきつづいている¹⁾。そして1975年にはブルー・カラーは33.7%、ホワイト・カラーは48.3%となるものと推定されている²⁾。フランスではブルー・カラーはまだそれほどまでは減少していないが、それでもその増加率は比較的僅少である³⁾。そうしたことが労働者の生活における変化の第一の徴候と見ることができるであろうが、工業化の進展による労働者の変化の問題は現代の中心的課題である。

II

英国でこの問題がとりあげられたのはおそらく Ferdynand Zweig の考察が最初であろう。彼は1960年 *The New Factory Worker*⁴⁾ をかいたが、そこで Zweig は結論として次のようにいつている。「労働者階級の大部分は高い生活水準に向っているばかりでなく、新しい価値・行為の基準および新しい社会的意識 new social consciousness にも向っている。しかし、こうした変化が社会生活、政治、経済生活にどんな影響を与えるのかはほとんど予見できない点である。しかしながらそうした諸々の変化は新しい時代の前兆、つまりわれわれの眼前に展開されてる新しい社会的水平線の兆である。」⁵⁾ ところでそうした労働者に生じていると見られる変化とは具体的にどういうことをさすのであるか。Zweig は1958年に英国の労働者に対して行った調査に基いて、次の点を指摘している⁶⁾。I. 第一に明かに見られることは労働者が安定的気持を著しく強くもつようになったことである。過去における失業のいがい記憶はほとんど消失しており、とくに40才代以下の労働者においては失業とはどういうことか全くわからなくなっている。だから労働者はその現在の生活水準の維持に対しては深い関心をもっている。従来みられた「明日のことは考えない」といった不確定な状況は全くなくなり、貯蓄するという傾向

が強く出ている⁷⁾。Ⅱ. つぎに見られることは期待の増大である。生活水準が向上したので、更に高い賃金を貰い生活を一層よくしていきたいと考えるようになり、自動車や耐久消費財への欲望がましている。そればかりでなく、金に対する蔑視的態度も消え、より賢明に、より合理的に金を使おうとする傾向が現れている。また自分の人生をむだにすぐすのではなく、他の階層の人々におくれないような何事かをなしとげようとする気持ちもでてきている。こうして労働者にも財産をもつものが増えてきている。その財産は主としてテレビジョン、自動車などの耐久消費財であるが、中には貯蓄をしその金額が3,000ポンドに達したものもある⁸⁾。Ⅲ. その次に特徴と考えられるのは家庭中心的生活 home-centredness である。労働者は所得のますとともに今までよりはるかに多く家庭での団欒を享受することになっている。Halbwachs の労働者の生活に関する記述によると、労働者は住宅が狭く家族が多くて家でゆったりできないため、仲間とカフェなどですぐすことが多いとされている。しかしゆたかになった労働者は家庭生活こそ幸福と楽しみの場所であると考えようになっている。そればかりでなく、暇の時には家の内部の装飾を自ら行ったりすることを趣味とするものが増えてきている。これとともに子供に対する関心も著しく強くなり、乳母車を押ししたり、子供の洗濯物をしたり、子供に本をよんでやったりすることが多くなっている。子供の授業を参観に出かける父親もふえてきている。そうしたことから父親のイメージも変ってきている。やかましい父親からやさしい、手助けしてくれる父親に代ってきている。従来労働者の家族では子供に対して母親だけしか愛情を示さなかったが、今日では父親も母親と平行して愛情を示すようになってき、子供の両親に対する愛情はバランスを保つようになってきた。これに関して総体的に父親が女性化したともいうべき現象が現れてきている。父親は怒った顔をみせることよりも、微笑とやさしさを見せることが多くなっているのである。Ⅳ. この反面、仲間、同僚とのつき合いは著しく減じてきている。それで労働者はさびしさを感じることはないのだろうか。家庭の仕事、子供に対する関心でみたまされた労働者はそうした淋しさを

感じる余裕をもたなくなっているし、また家にはテレビジョンやいろいろの趣味がある。Zweig は共産党員の労働者でさえ、社会問題などに対して余り強い熱意を示さなくなっているという。このように仲間からのへだたりは労働者の意識における人格化傾向 personalization と結びついている。人格化というのは労働者の関心が観念とか一般的客観的問題よりはむしろ人間関係 personal relations に強く志向していることを意味するものである⁹⁾。テレビやラジオでも何がよりは誰がということが中心的主題となっている。この傾向はまた労働者の個性化という現象をも伴っている。Ⅴ. 労働者はまた従来のような大言壮語とかスローガンよりは具体的なよりよい条件、よりよい機会を好むようになってきている。だから階級闘争ということは段々と労働者をひきつける力を失っている。抑圧された、搾取されている階級としての労働階級という観念は全く無意味なものとなっている。労働階級ではあるが、貧困ではないというのが労働者の典型的な考え方で、階級区分を敵対と隔離として特徴づけることも少なくなり、労働者の団結というエートスも力を失っている。と同時に伝統に対する尊敬の気持ちも強くなっている。Ⅵ. 労働者の中に新しい社会的訓練といったものが根をおろしてきているようで、近代経営のヒューマン・リレーションズの技法などが漸次認められてきている。また新しい仕事の慣行や対人的雰囲気にもなじんできている。だから労働者は強制されて職場で仕事をしているというよりは、むしろよいパートナー(協力者)といった存在となってきた。こうした労働者は彼等の父親の世代の労働者に比べて幸福であるかどうかは議論のわかれる所であるが、一般的には満足感を持ち、自分の仕事に誇りをもっているものが多い。それに余暇は余り多くないので多忙であり、家に戻ってもテレビや子供や家族のことで追われているから有閑階級にはなっていない。Ⅶ. ただ問題は労働者の文化的水準、文化的関心である。労働者の胃はみたまされ、身体的な必要は十分に充足されているが、精神的面の充足はまだまだである。労働者の文化的関心はまだごく限られたものでしかない。だから経済的面で充足と教育や文化面での充足の間にはかなり大きな隔りがある。このギャップを

どのように埋めていくかが今後の課題であるが、Tawney が規定した獲得的社会 *acquisitive society* がその境界を拡げていき、その自然の敵に漸次自己の信条 *credo* を認めさせることに成功したことは否定できない。

こうした Zweig の労働者階級観は労働者の生活水準が漸次向上して中産階級に近づいていることを示唆したものである。このような指摘は1950年代における英国労働党の勢力減退などの新しい社会的政治的情勢が従来のような労働者観では説明できなくなってきたことについての反省から生れたものである。ところでこの Zweig の見解に対して John H. Goldthorp, David Lockwood などは「ゆたかな労働者」*Affluent Worker* 3巻を出して、労働者階級のブルジョワ化説を実際に調査を行って検討した¹⁰⁾。この著書に先立って David Lockwood は「新しい労働階級」¹¹⁾ という論文において、ゆたかになったとか貧しいということそれ自体が自動的に政治的態度が保守的に変わることを意味するのではないことを明かにしている。Lockwood によると、労働者が電気洗濯機などのような耐久消費財を買うようになったからといって、労働者がそれを中産階級の地位のシンボルとして求めていると考えるのは誤りであり「そう考えるのは社会学的には正常ではない。また労働者が保守党に投票するのは彼が中産階級の帰属意識をもつことに基くのであるとはいえず、そうしたことは労働者の態度や他の社会的領域における行動を調査してみなければ明かにされない」¹²⁾と主張している。「ゆたかな労働者」はそうした問題に対する回答を出すための調査であったのである。Lockwood はとくに労働者の中産階級化というテーゼを証明するためには「労働者が生活水準が向上しても果してそれによって彼等が中産階級の人々から社会的対等者として受け入れられているかどうかを明かにすることが必要であること」を強く力説している¹³⁾。こうした点は特に著書「ゆたかな労働者」において検証されている。だから、ゆたかな労働者は比較的高い水準の賃金を得ているが、仕事に対する満足度は決して高くはない。彼等の中で仕事自体に面白さを感じているものは比較的少い。しかし報酬がかなりよいから仕事をやめようとしないのである。つまり

ゆたかな労働者たちは圧倒的に経済的考慮に基づいて、極めてわりきって仕事をしているのである。そして高い給料によって彼等は家族との水いらずの生活を享受でき、家庭を本当に気持のよい快適なものとするに生きがいを見出しているのである。この点は Zweig も指摘している点であるが、20世紀のはじめに Halbwachs¹⁴⁾ が描いたドイツ・フランスなどの労働者の生活とは著しく異っていることは明かである。Goldthorp や Lockwood がいうようにこうした家庭生活中心的な生活に労働者が真の悦びを見出していることと中産階級の態度とどのような因果関係があるのかは明かではないが、しかしこれは労働者の生活にとって大きな変化であることは明かであろう。そうした変化は生産技術の変化や生産性の向上によってもたらされたものである。そうした点で労働者の生活に変化が生じてきたことは認められなければならないのである。

ロックウッドなどの調査によると、労働者の仕事に対する手段的志向はまた組合に対する態度にも現れている。労働者たちの組合への参加は正式の支部活動の段階においては消極的で低調であるが、職場段階においては活潑で、種極的である。そして労働者の間にはいわゆる連帯意識が強いことを示すような現れは少しも見られない。しかしこれらの労働者は政治的に労働党に対してそっぽを向いているのではない。彼等の労働党に対する支持投票率はホワイト・カラーのそれよりもはるかに強い。それは労働党のイデオロギーに共鳴しているからなのではなく、労働党が彼等の利益を代表してくれている、つまり彼等の生活水準の向上に貢献してくれていると考えるからであって、社会改革の実現を目ざしているからなのではないのである。だから、そこには生活水準の向上を可能ならしめてくれるという「手段的態度」*instrumentalism* が強くはたらいているのである。Lockwood たちはそうした政治的態度は決して中産階級のものではなく、ブルジョワ化という説はあたらないとみている。がしかしとにかく労働者が従来考えられたようなものではなくなっていることは否定できないようである。更に Lockwood たちは労働者の生活水準は向上し、ホワイト・カラーとの差は縮小してきていても彼等はまた中産階級との

間に社交的關係をもつことも少いし、また通婚關係も少いことをあげて、労働者のブルジョワ化説を否定する。Lockwood はこれより前にホワイト・カラーについて調査した *Blackcoated Worker* (1958) においても、そのことを指摘している。たしかにその点は重要な指摘である。ホワイト・カラーとブルー・カラーの所得の差は後者の賃金水準の上昇ともなつて漸次狭ばまっているが、そして時にはブルー・カラーの上層部の所得はホワイト・カラーの下層を凌駕することもおこっているが、それでもブルー・カラーがホワイト・カラーの仲間にはいつて対等者として扱われることは少いし、また職場の性質上、仕事の上でブルー・カラーは経営の上層部と接することが少く、より多く接するのは人間ではなく機械とか原材料などであり、そうした点からホワイト・カラーの地位がその数的増大、所得の相対的低下によって低くはなつていてもブルー・カラーとの境は容易には消滅しないことを指摘している¹⁵⁾。Zweig はその点を指摘してはいないが、労働者の経済的水準は向上しても、文化的水準の向上がおくれている点を指摘している。この点は Lockwood の指摘と関連させて理解されなければならない。しかしそうした文化的水準は今後労働者の余暇が増大したり、訓練が進んでくると変つてこないともいえないであろう。Lockwood たちはこの点に関して労働者の願望水準がホワイト・カラーのそれと異つており、社会的地位上昇の願望が少いことを指摘している。そうした点からみる限り今日の英国の社会で労働者がゆたかとなり、生活水準が著しく改善されたにもかかわらず、ブルジョワ化したとみることが困難なことは否定できないことであろう。ただそれにもかかわらず、労働者の生活全体が上昇してきていることも明白な事実であることは看過してはならないのである。しかも、労働者の生活水準の向上はごく最近になつて生じた現象である。短かい期間に生活水準の向上とともに労働者の文化的水準の向上が実現されることを期待することはできない。その意味において、労働者が市民社会に完全に統合されているとみることが不可能である。とくに伝統の強い英国社会においてそうした統合が短期間のうちに、完全に実現されることが不可能であることは当然である。

ただ「ゆたかな労働者」の問題は、労働者の生活水準の向上とともに、労働者全般に社会的に上昇していく途が開かれてきたことを示唆している。しかしそれにもかかわらず、クロジェが指摘しているように¹⁶⁾ ホワイト・カラーとの社会的隔りは労働者の従事する仕事の性質からいつても簡単には除去されないのである。

III

これに対して、フランスの場合はどうであろうか。同国で「新しい労働者階級」という問題がおこつてきたのは1960年になつてからである。まずフランスの文献においては「ゆたかな」という形容詞は余り用いられていない。しかしフランスにおけるこの問題に関する論争は非常に多く行われており、Gérard Adam が1968年に発表した「新しい労働者階級に関する論争の現況」¹⁷⁾によると、関係の文献は著作、論文を含めて148の多きにのぼっている。しかもこの問題は引き続き今日まで論ぜられていて、今日のフランス社会学の重要問題の一つとなっている。この論争ははじめはマルクス主義的立場の人々と労働組合でこれに反対な立場にたつ C. F. T. C. の指導者たちの間においてなされたようである¹⁸⁾。この論争はイデオロギー的色彩の強いものであつて、その点で Zweig や Lockwood などの実態調査をふまえた論争とはかなり性格を異にしている。そこでそうした問題にはいる前に一応フランスの労働者の現況を統計的からみていくことにする。労働者の有業人口中にしめる比率は1962年には36.7%であつたが、1968年には37.7%となり、ごく僅かではあるが上昇している。またこの間における実数の増加率は9%でしかない(ただし半熟練労働者 *ouvriers spécialisés* は13%の増)のに対して、事務従業者はこれと同じ期間に26.4%、専門職業・高級管理職は29.6%(しかもこの中技術者は37.9%の増を見ている)増加している¹⁸⁾。だから工業化の進展に比例して労働者(工業における)の増加率は大体頭うち状態に近づいている。そればかりでなく、産業における技術の著しい発展とオートメーションなど機械利用の高度化に伴つてプロレタリアートとしての労働者という概念は漸次技術的にも経済的にもまた社会的にも基盤を失つ

てきていることが指摘されている¹⁹⁾。それとともに労働者の職務はオートメーション産業などにおいては肉体的な労務ではなく監視などのような操作的なものに変っているというような変化もあるし、また一部の装置産業では労働者の職務遂行に必要とされた機械や道具を駆使用する技能の熟練はその重要性を失いこれに代ってチーム・ワーク

というような人間的要因が大きくなったりするという変化も生じてきている。また一般に労働者の生活水準も向上してきていて、1963年における社会階層別所得分布は次表のとおりであるが、ホワイト・カラーとの差が著しく縮小していることが注目される。ことに男の場合、その接近は著しい。

階層別所得分布表

月給額(単位フラン) (en francs)	全 体 Ensemble des salariés	上 級 職 員 Cadres supérieurs		中 級 職 員 Cadres moyens		事 務 職 員 Employés		労 働 者 Ouvriers	
		男 homme	女 femme	男 homme	女 femme	男 homme	女 femme	男 homme	女 femme
Moins de 281 F	5,0	0,9	2,0	2,0	1,9	5,0	4,7	5,1	8,5
De 281 à 375 F	4,2	0,2	1,2	0,5	1,4	2,7	5,8	3,1	12,2
De 375 à 469 F	7,9	0,2	1,5	0,6	2,7	4,3	9,7	6,2	23,1
De 469 à 562 F	10,1	0,4	1,9	0,9	4,1	6,2	13,2	9,6	22,4
De 562 à 750 F	21,7	1,2	6,3	3,8	12,0	18,6	27,6	25,8	22,9
De 750 à 937 F	18,5	1,6	6,3	8,8	16,4	24,0	20,7	23,3	7,2
De 937 à 1.406 F	19,8	8,6	21,2	33,1	40,3	28,6	16,4	21,4	3,1
De 1.406 à 1.874 F	6,0	13,3	19,1	24,5	13,7	6,8	1,5	4,2	0,5
De 1.874 à 4.690 F	6,0	58,9	36,6	24,2	7,2	3,6	0,4	1,3	0,1
Au-delà de 4.690 F	0,8	14,7	3,9	1,6	0,3	0,2	—	—	—
Effectifs 総数 (en milliers) (千人)	6.627	291	27	552	132	609	742	3.339	775

この結果労働者においても耐久消費財を購入する傾向が大きくなり、そのため月賦購入者が著しくふえている。1960年の数字であるが、月賦の中家庭用品購入に向けられる総額はホワイト・カラー33.0%に対し労働者33.8%となっており、労働者におけるテレビの購入は著しく多くなっている。こうした消費生活の変化が労働者の変化を考える場合の基礎的条件として考えられなければならない。しかし共産党やC.G.T.の理論家や指導者たちにはそうした事実は見せかけのものであり、労働者の生活は依然と苦しく、また労働者の行動や意識に若干の変化はあっても労働者の本質には変りないばかりでなく、むしろ大衆消費の普及によって労働者の生活はむしろ悪化していると見ている²²⁾。そうした見解を支持する理論家たちも少なくない。このような公式的見解についてここではそれを詳細にとりあげる紙面の余裕はないので、労働者の生活におこった変化を認めてい

ゆる「新しい労働者階級」という主張をのべている人々の主なものを以下に見ることとしたい。その主なものはマレー S. Mallet とトゥレーヌ A. Touraine の見解である。

マレーによると、従来いわゆる労働者の生活様式 le mode de vie や彼のつくり出す文化はその労働遂行の仕方と結びついていた、ところが産業社会の発展の過程の中において、その結びつきは分離していき、今日においては労働者の生活は漸次二つの部分にわかれてきている²³⁾。

その二つのうち一つは労働者の生産における生活の面で、それは最近の労働時間短縮の傾向からみると、漸次縮小しているが、この生活の面は職場において展開されるものであるが、そこにおける社会関係は基本的には仕事がその下で行われる各種の条件によって決定されている。「ところがもう一つの面は労働者の私生活でそこには労働は何の関係ももたないでいる。それでこの二つの

面をつなぎ合わせているのは賃金だけであるが、フランスにおける家族手当、住宅手当、退職金、社会保障などの社会制度による手当の漸進的増額は労働条件によって決定される社会関係のもつ意義を減少せしめている。労働者階級の日常生活は今では特別な社会学的行動ではなくなりつつある。こうした二つの面の分離という事実は労働者階級という概念を再検討せしめるのに十分なものである。』²⁴⁾ 技術革新の著しく進んだ変化はこうして労働階級についての従来の定義をも不安定なものにしてしまう。しかしながら、具体的な労働者、労働者階級は生産力に対してはたらしかかっていることによってしか存在しない。そのことは労働者は生産手段の所有者との対立的情况においてしか存在しないことを意味する。だからマレーは労働者階級を把握するには社会生活の現実的構造のもっとも下部すなわち生産の単位において把えなければならないという²⁵⁾。ところで労働階級といっても決して包括的な労働者階級 *classe ouvrière globale* というものはないし、プロレタリア的文化の同質性も存在しないことを意味する。労働者が同質的であるとみることは誤りである。それで、労働者階級の中から労働運動の組織や活動の形態の中心となる構造的核 *noyau structurel* を認めていかなければならないのである。そうした核は現代の高度工業社会においてはどこに見出されるのであろうか。マレーは労働組合の歴史を概観しながら分析によって労働運動の組織のモデルを抽出し、この組織モデルとそれを決定する生産の経済的・技能的・技術的關係 *rapports économiques, techniques et technologiques de production* との対応関係を明かにする²⁶⁾。資本主義のはじめの段階は家族的資本主義であるが、この時期の組合は職能別組合 *syndicat de métier* であった²⁷⁾。これにつぐ工業の大規模企業を中心とする資本主義の段階では組合の形態は産業別となって来る。ところが、20世紀後半になると、従来の産業技術に革命的变化がおこりオートメーションが登場することとなる。現代のこのオートメーションの時期であるが、この段階における人間の労働の変化は次のような特徴によって区分されることになるのである。

1° オートメーションは大規模な機械生産の進

展の結果生じてきた労働の細分化を真に弁証法的に否定するものである²⁸⁾が、そこにおいては従来の直接の生産的労働と間接的に生産に関係した労働の区別が不明確となってくる。そして労働者の職務はむしろ監視作業というべきものになってくる²⁹⁾。

2° オートメーションは電子工学の発見によってはじめて真に発展することができるようになったものであるが、それは従来人間の肉体的作業によってなされていた作業の全体と従来人間の頭脳に頼るしかないと考えられていた一部の作業も行うことができるようになった。こうしてフィード・バック、誤りの自動的修正、作業の自動的規制などが今日では経済的事実のうちにはいりこんでいる。

3° こうして、人間が介入するのは本来の意味での生産過程の前と後の段階においやられてきている。すなわち一部は創出、一部は統御から成る知的創造の領域においてしか人間の介入の必要はなくなってくるのである。

ところがオートメーションが発達するためにはまた経済活動が従来のような古典的自由主義に基づくものであってはならない。つまり自由市場の自動的規制によっては生産の発展は確保できなくなるのである。そこでマレーは現代の産業は次の二つの重要な資源に訴えることが必要となるという³⁰⁾。すなわち、その一つは規制的用具および主要な金融源としての国家であり、もう一つは消費の組織化である。

上述したような条件から、企業に対する労働者の統合 *intégration* も従来のもとは意味が異ってくる。マレーは「オートメーションの段階においては、生産費にしめる労働者の費用の比重は重要性を減じ、代って資財の償却をはやめることが利潤極大化にとって決定的要因となる。そこで十分な技術的知識をもち同時に作業の特殊化された技能に迅速に適応できる高度の熟練労働力の養成こそは投資効果を最大にするための必要条件となって来る。だからそこでは賃金の負担は恒常的費用となり、全体の過程の不可欠の部分となる。企業主が社会心理的過程を生産の固定的単位制定のための技能として重視するのはこのためである。そこで利潤の極大化を求めるとは、労働時

間を量的に増大せしめるよりは、生産性——それは個々の労働者の能率増進ではなく、仕事の組織の効率増大によって決定される——の質的増大が重要視されることになる。だから労働者の企業への統合は使用者の宣伝の産物ではなくなり、労働の組織において生じた一定数の変化の目標の反映となってくる。³¹⁾ として、現代の代表的産業においてみられる傾向からみると次の諸点がこうした統合の客観的性格となっているという。その一は賃金の面における統合である。賃金は個人の能力によるものというよりは全体的賃金の個人的配分にほかならず、しかもこの配分は労働者個人の能率評価に基づくのではなく、むしろ労働者の職位についての評価のみに基づくものとなっている。こうした労働者の日常生活は全く企業の生活に統合されてくることになる。その二は職業訓練面での統合である。新しい形の労働組織では企業に特有な特殊作業が多くなる。そこでそうした作業に適するように訓練された労働者の技能や知識は他の企業において無条件で妥当することがなくなってくる³²⁾。その三は雇用安定の面における統合である。上述の二つの点からみて労働者の流動は従来の企業の場合と異って、人事管理上の障害となってくる。そうして一方組合の関心事である雇用の安定の要求とが合致して労働条件の中に *carrière* (勤続経歴) という概念が導入されてくるようになる³⁴⁾。

こうした企業——オートメーション化された企業——ではたらく労働者は新しい労働者階級であると名付けられるのであるが、マレーはこの新しい労働者には新しい技術的発展によって生じた監視作業や操作員のほかに装置機具の補修維持を担当する保全労働者 *ouvriers d'entretien* と研究的事務にたずさわる技能職員 *techniciens* とが含まれるという³⁵⁾。後者は、従来の事務職員が職場が労働者の現場から離れているため、もっていたような一種の優越感をもはやたない。というのは彼等の職場が労働者のそれと接近しているからである。その上そうした研究的業務も工場のそれと同じように機械化され、計画的リズムに従って営まれるから、両者の差はむしろ消滅の方向にむかっている。更にもっと両者にみられる職業病も類似性が強くなっており、工場と事務所との労働

条件は全く同質化の方向にむかっている。そうした意味でこの新しい労働者階級は一見考えられるような異質性は全くもたないのである。

こうしたことから新しい労働者階級は企業別組合 *syndicat d'entreprise* を結成する方向に向っている。そうした労働者の多い先進的産業では組合の組織率は50%から90%である。これは伝統的な産業においては組織率が15%から20%に止まっていることが多いのと著しい対照をなしているのである³⁶⁾。そればかりでなく、オートメーション企業においては上述したような労働条件の類似性と特定性、企業の経済的条件と要求との関連性などからこれら新しい労働者は企業を基盤とした組合活動を活潑に行うようになってきている。産業別組合が一般的であるフランスにおいてはこれは新しい動きであるとみなければならない。

それと同時に注目されることはそうした組合活動が企業の管理に対して支配の要求 (*revendications de contrôle*) を示していることである。これは賃金の条件もまたその他の労働条件もすべて企業の経済的生活に結びついてきているため生じた現象であるが、彼等の支配の要求は生産の技術的経済的条件をも対象とするようになってきている。そして1959年には一部の組合は企業別の協約が産業部門別または地域別のそれにとり代るべきだという考え方を発表している³⁷⁾。1960年以降 C.F.T.C. が1965年以降は C.F.D.T. が企業内における組合活動の法的承認を要求する運動を特に力強く展開していたのもこうした動きと全く無関係ではないようである³⁸⁾。

こうして企業内における支配 *contrôle* の活動を志向するこれら新しい労働者階級こそ、これから発展していくものであり、その勢力は組合運動において大きくなっているというのがマレーの結論である。ところでこれらの新しい労働者は他の労働者のピンはねをしてあぐらをかく労働貴族ではないかという疑問が出されている³⁹⁾。これに対してマレーは新しい労働者階級は従来の職長などとは異り、もっとも発展した資本主義的産業と結びついており、彼等の享受する高い生活水準はそうした企業の高い生産性のみによるものである。彼等は企業に対する種極的参加を槓杆として、社会構造の改革、民主的な計画化の実現に向

うもので、新しい時代における労働者運動の核心となっていくのであるとみている。

このマレーの見解と類似しているのがもっと精密な分析を行っているのがトゥレーヌ A. Touraine である。彼は労働者の職務 *travail ouvrier* が技術の発達によって異ってくることを明かにしたが⁴⁰⁾、オートメーション産業における労働の特徴を次のようにみる。(1) 半熟練労働者 *ouvriers spécialisés* の数が熟練技能労働者のそれに比して減少する。(2) 生産や製造作業に従事する労働者に代って信号をよみとり、生産過程を間接にコントロールする監視作業員が登場する。これらの労働者は信号をよみとり、記録するだけでなく、それらを理解しなければならない。技術的に大きな技能をもつ必要はないが、機械からうけとる種々の情報を一の全体にまとめることができるような一般的な理解能力を必要とされる。(3) 維持營繕的職務に従う労働者は従来生産の職務と離れていたが、オートメーション産業ではそれと接近する。そしてその仕事は単に修理だけでなく、たえず装置の運行が円滑にいくよう配慮しなければならない。そのため技術的問題の全体に通暁しなくてはならず第一線技能者 *technicien* の職務と類似してくる。これら維持部門の労働者の比率と重要性は先進的企業になるほどましている⁴¹⁾。

トゥレーヌもこうした労働者も新しい労働者階級とみているが、彼等の仕事全体は肉体的作業より伝達作業が重要であることにより特徴づけられるという。しかし現代社会における労働者はこの外に組立労働者や伝統的な熟練を要する技能労働者もその姿を消しているわけではないから労働者階級の同質性はむしろ減少してきている。そしてまた新しい労働者の間においても職務的にみると差は決して少くなっていない。しかしながら、それらの差にもかかわらず、その間に一つの連続性があり、それは従来の熟練技能の高い労働者と非熟練労働者との間におけるよりもはるかに大きい。その連続性は彼等の仕事がすべて統合された企業において規定されていることに基くものである。だからかつては一定の技能等級に属することによっていた統一の原理は同一集合的組織に所属することによって変っているのである⁴²⁾。そして現代の工業社会においては対立抗争 *conflits* は生産手

段の所有から生ずるよりは知識や情報を所有し、管理するものが支配的地位を占めることによって生じている⁴³⁾。そして今日の社会における支配的なのは経済体制の内的矛盾ではなくて、社会体制の要求と個人的要求との一般の矛盾である⁴⁴⁾と考えられる。こうした状況において、もっとも闘争的なのは必ずしも社会的支配にもっとも服従させられている部類ではなく、むしろ情報などの管理権をもつ権力者に対してその駆使する生産用具の利用をもつて抗しうる中心的な要素、つまり技能度の高い労働者なのである⁴⁵⁾。それで今日では科学的・技術的知識をもつ人々がそうした抗争的彼割を担うことになるという。トゥレーヌは1968年の5月運動において主導権をとったのも、伝統的な労働者ではなく、現場技能者など熟練技能労働者と不満をもつ知識人や学生であったとみている⁴⁶⁾。こうした意味において、トゥレーヌの見解はマレーのそれと極めて接近しているのであるが、トゥレーヌはマレーのように新しい労働者が革新推進の中核的存在であることを明示的にはのべているのではない。トゥレーヌにとっては労働者の異質化の傾向が新しい労働者の出現とともに重要な点であった。マレーやトゥレーヌと同じく技能水準の高い労働者が今日のフランスでは労働運動の推進役をつとめていることは *Belleville* によっても指摘されている⁴⁷⁾。そして *Belleville* においても労働者の種々の層を結合せしめているものは同一企業への所属であり、それによって賃金などに対する共同の利害が作りだされていることが注視されている。しかし労働者の利益を擁護し、促進する組合運動の動きにおいて、民間の私的企業と公共的企業との間には大きな相違が出てきていることも指摘されている⁴⁸⁾。これらの国営企業または公共企業においては、これらの企業の非生産的性格や経営の管理方式が異なることによるものとされている。しかし、注目すべきことは、これらの論者によって、新しい労働者階級の出現とともに、企業内における活動が法的に禁止されていた組合活動がこれら技能水準の高い熟練労働者を中心とする新しい労働者の数的勢力の増大とともに、企業内の活動にその戦略的方向を向けだしてきたという指摘がなされていることである。すでに *Touraine* も「組合運動の社会学」⁴⁹⁾

という論文で、新しい段階における組合運動は支配 (contrôle) の組合運動として把握されるべきであるということを強調している。1968年の5月運動以降C.F.D.T.の勢力が著しく増大した⁵⁰⁾のも、とくにC.F.D.T.がこの企業内における組合活動の法的承認を獲得することに大きく運動を展開したことによるものであると見てよいであろう。

IV

英国における「ゆたかな」新しい労働者についてのとり上げ方とフランスのそれとでは接近の仕方が根本的に異っている。英国においては何よりも労働者の生活水準の向上が著しく進み、中産階級的生活水準への接近が中心的テーマとなり、それが果してブルジョワ化を意味するかどうか論議の焦点となっている。これに対してフランスにおいてはオートメーションなどのような先進的産業において現われてきた技能水準の高い労働者の組合活動乃至は労働運動における役割が著しく変化してきていることが論議の中心である。そして英国においては新しい労働者に見られる手段的態度 instrumentalism を中心として労働者の生活態度の変容が注視されてきているのに対して、フランスでは技術発展を独立変数とし、これに伴って生ずる労働者の組合運動に対する考え方の変貌がどういう意味をもち、どのような含意をなげかけているかの解明に焦点がおかれている。たしかに産業社会の発展にともなって労働者の中に新しい層やそれに伴って従来見られなかった生活・態度に顕著な変化の現れたことは事実であろう。しかしこうした新しい労働者とよばれる人々が全体のうちでどの位の比率をもっているのかは明かにされていない。英国の場合、対象となった労働者はルトン Luton という新興工業都市に移住してきたものが大多数をしめている。彼等が従来からの生活、労働者特有な共同体の生活から切りはなされていることは当然のことであるが、彼等のもっている「手段的態度」はそのことと結びついているものといえるのではないであろうか。そうだとすれば、それは何によって生ずるのかが問われなければならない。新興工業都市以外の工場で働いている「ゆたかな労働者」は実際存在するのかどうか、そうした労働者において現れてくる変化はど

うなのかが問題とされなければならないのである。またそこで扱われた対象は新興工業都市における労働者ではあるが、石油産業などのもっとオートメーション化の進んだ企業における労働者は調査の対象に含まれていないことは遺憾なことであるといえる。フランスの場合においては、技術発展の論理的区別を土台として労働者の態度の変化が識別されているが、労働者を区別してみいくのに技術の論理的発展という点からだけから見るだけで充分であろうかどうか問題である。たしかにそうした見方は仮説としてみていくことは重要であるが、この仮説はまず論証されなければならない点である。トゥレーヌやマレーの説明は極めて論理的ではあり、また強い説得力をもっているが、それだけでもっと実証的な裏付けが必要である。フランスの新しい労働者についてはその生活水準の向上についての説明がとくに欠けている点が問題である。この点においては Rainville の行った調査は注目に値するものである⁵¹⁾。彼は1950年代のはじめに Chombard de Lauwe の行った調査⁵²⁾をふまえて現代の労働者が Chombard de Lauwe の結論に明かにされたように社会生活において周縁的存在から果して脱しきれているかどうかを調査したものである。対象地区はパリ地区で必ずしも新しい労働者だけではないが Rainville は「労働者の現代社会の社会・経済・文化的変化に対する適応の仕方は、個人的にその経済的地位や社会的地位によって異なるが、一般的には伝統的な力の重みと新しい革新的生活様式との間を浮動する不安な状態を示しており」⁵³⁾、たえず新しい均衡を求めているが、それが完全に実現されることがないため、根本的に不満、欲求不満を抱いている⁵⁴⁾ことを指摘している。つまり労働者は新しい生活を享受しながらも気持の上では種々の矛盾と不安定から脱しきれないでいる。その意味では経済生活向上したが真に社会的に安定した状態にはいたっていないでいる。彼等はある意味でもはや労働者からは脱却しようとそれぞれの仕方でも努めてはいるが、しかし結局は労働者であることに落ちつかざるを得ないという断念の気持でいる⁵⁵⁾のである。新しい労働者はそうしたことから、マレーなどが指摘しているような組合運動のっているのであろうか。そうした点について

はこれからの解明をまたなければならない。しかし新推進役となし労働者の問題はもっとそうした問題をほりさげていくことによって実りある成果をもたらすことができるのであろう。労働者の多様性、異質性について全面的な調査、検討が何よりも要求されるのである。

- (1) Faunce, Problems of an Industrial Society p. 56 の表をみよ。
- (2) *ibid.*,
- (3) E.H. Lacombe, Les changements de la société française, 1971, p. 21
- (4) Twentieth Century に掲載されたが、のちに "The Worker in an Affluent Society, 1961年" に再録された。
- (5) F. Zweig, The Worker in an Affluent Society. p. 212
- (6) Zweig の行なった調査は主として大規模の、組織のととのった生産施設における労働者を対象としたものであるが、彼は同じことが他のすべての労働者についてもいえるとのべている。
- (7) F. Zweig. *op. cit.*, p. 205—206
- (8) *op. cit.*, p. 206 (1ポンドは当時約1,000円)
- (9) *op. cit.*, p. 209
- (10) これについては本紀要第21号の書評 (p. 119—123) を参照されたい。
- (11) The 'New Working Class' in Archives européennes de Sociologie, 1960. n. 2 p. 248—259
- (12) *op. cit.*, p. 252—253
- (13) *op. cit.*, p. 251
- (14) Halbwegs, La classe ouvrière et les niveaux de vie, (1912).
- (15) Lockwood, Blackcoated Workers. pp. 196—198
- (16) W. Crozier, Le monde des employés de bureau, 1964
- (17) *op. cit.*, p. 105
- (18) E. H. Lacombe, Les changements de la société française, 1971. p. 21
- (19) G. Fridmann, Tendances d'aujourd'hui: Perspectives de demain, in "Traité de Sociologie du Travail" (ed. par P. Naville et G. Friedmann), t. 2, 1962. p. 375
- (20) J. M. Rainville, Condition ouvrière et intégration sociale p. 214
- (21) *op. cit.*, p. 218
- (22) *op. cit.*, p. 104
- (23) S. Mallet, La nouvelle classe ouvrière, 1963. p. 8
- (24) *ibid.*,
- (25) *op. cit.*, p. 21
- (26) p. 28
- (27) p. 30—31
- (28) *op. cit.*, p. 49
- (29) *op. cit.*, p. 50
- (30) p. 53—54

- (31) *op. cit.*, p. 55
- (32) *op. cit.*, p. 55—56
- (33) *op. cit.*, p. 56
- (34) *op. cit.*, p. 56—57
- (35) *op. cit.*, p. 58—59
- (36) *op. cit.*, p. 60
- (37) *op. cit.*, p. 61
- (38) 企業内における組合活動法的承認はついに1969年に承認されるようになった。
- (39) *op. cit.*, p. 66—68
- (40) A. Touraine, L'évolution du travail ouvrier aux usines Renault, 1955.
- (41) Le travail ouvrier et l'entreprise industrielle, (L'Historie Générale du Travail t. IV) p. 25—27
- (42) A. Touraine, *op. cit.*, p. 31
- (43) A. Touraine, La Société post-industrielles, p. 86
- (44) *op. cit.*, p. 87
- (45) *op. cit.*, p. 90
- (46) Mouvement du mai, 1970.
- (47) Pierre Belleville, Une nouvelle classe ouvrière, 1963. p. 290
- (48) *op. cit.*, p. 282
- (49) A. Touraine, 'Contribution à la sociologie du mouvement ouvrier' Cahiers Internationaux de Sociologie, 1960, n. 28, pp. 57—88
- (50) La C. F. D. T. p. 9
- (51) Rainville, Condition ouvrière et intégration sociale 1967.
- (52) P. H. Chombard de Lauwe, La vie quotidienne des familles ouvrières. (1954)
- (53) Rainville, *op. cit.*, p. 187
- (54) *ibid.*, p. 188
- (55) *op. cit.*, p. 190

参考文献

Pierre Belleville, Une nouvelle classe ouvrière, 1963

Serge Mallet, La nouvelle classe ouvrière, 1963.

Alain Touraine, La sociologie de l'action, 1965.

Alain Touraine, La société post-industrielle, 1969.

Jean-Marie Rainville, Condition ouvrière et intégration sociale, 1967.

Georges Friedmann, Le travail en miettes, 1964.

'Tendances d'aujourd'hui, Perspectives de Demain (Traité de Sociologie du Travail t. II. 1962)

E. H. Lacombe, Les changements de la société française, 1970.

Alain Touraine, et Bernard Mottez, Classe ouvrière et Société globale. (Traité de Sociologie du Travail)

Alain Touraine, 'Contribution à la sociologie du mouvement ouvrier' (C. I. S. 1960, n. 28)

Alain Touraine, Le travail ouvrier et l'entre-

- prise industrielle (L'Histoire Générale du Travail, t. IV)
- C. F. D. T. (édit par René Bonéty, Maurice Bouladoux, et al), 1971.
- Marc Maurice et Michel Arliaud, Une critique de la thèse de l'embourgeoisement de la nouvelle classe ouvrière, *The Affluent Worker*, (Sociologie du Travail, 1970, n. 1)
- F. Zweig, *The Worker in an Affluent Society*, 1961.
- Goldthorpe. Lockwood, et al. *The Affluent Worker*, t. II.
- D. Lockwood, *Blackcoatcel Worker*, 1958.
- "The New Working Class" in *Archives européennes de sociologie*, 1960, n. 2
- Faunce, *Problems of an Industrial Society*.
- André Andriewx et Jean Lignon, *L'ouvrier d'aujourd'hui*, 1960.